

ドキュメンタリー映画

# 福島は語る

土井敏邦 監督作品

2時間50分の14人の証言が映し出す



## いまなお続く“深い思い”

監修・撮影・編集 土井敏邦 朗読・題字 高橋長英 写真 森住卓 後援 城南信用金庫 挿入歌「ああ福島」(李政美) / 日本 / カラー / 170分

### まれにみるドキュメンタリー

映画「福島は語る」は原子力発電所の事故の被害者たちが、受けた心の傷を、その本人たちが、あくまでも静かに、そしてあくまでも深く掘り下げて語るのを、真剣に聞く映画です。人々の表情が、口調が、これ程雄弁に一つの深い思いに結集した映画が、これまであったらどうかと、私は驚き、感動しました。まれにみるドキュメンタリーです。 佐藤忠男(映画評論家)

### 涙なくして見ることは出来ない

東日本大震災の夜、私は一晩中、福島第一原発事故の深刻な事態を受け止めていた。そして爆発と放射性物質の拡張。「福島は語る」は、7年の歳月を経て、原発事故により避難を強いられた人たちの言葉を記録し、憤りと悔しさ、切なさや絶望、非情な事故によつて奪われた人生を克明に語る映像作品だ。この映画を涙なくして見ることは出来ない。現在まで続く被害を封じ込めている「沈黙の圧力」とは、鈍感で浅薄な「無関心と忘却」だ。鉄の爪が大地に根ざして生きてきた人々を容赦なく襲い、傷つけ、引き裂いた。この暴力に私たちひとりひとりが加担していないかを問いかけてくる。

保坂展人(世田谷区長)

東日本大震災から8年になる。2020年の東京オリンピックを前に日本中が浮足立つなか、フクシマは「終わったこと」として忘れ去られようとしている。しかし、原発事故による放射能汚染で故郷や住処を追われ、生業を失い、家族離散を強いられ、将来への希望をうばわれた十数万人の被災者たちの傷は癒えることなく、腫み、疼き続けている。その被災者たちが、心底に鬱積した深い思いを吐露した。1000人を超える証言者の中から選り抜いた14の「福島の声」を、いま日本に住むすべての人に届ける。

土井 敏邦

# 2020年1月11日(土)

せんだいメディアテーク7Fスタジオシアター

①10:00 ②13:20 ③16:40

大人 前売り券1000円 当日券1300円

学生 500円 高校生以下 無料

前売り券販売 メディアテーク1F museumshop6 / 女性ネットみやぎメンバー  
電話予約 090-2963-6435(本田) FAX 申込 022-215-3120

子どもたちを放射能汚染から守り 原発から自然エネルギーへの転換をめざす女性ネットワークみやぎ

【略称】女性ネットみやぎ

TEL・FAX 022-215-3120

メール:housyanoujoseinet@hotmail.co.jp

ブログ:joseinet-miyagi

星ひかり



そもそも、なぜ事故は起きたのか、そもそも、なぜ私たちは逃げなくてはいけなかったのか。

…早々に非難しなければならぬ地域に私たちは住んでいたわけです。それが隠されていて、自発的に逃げた、と…

池脇美和



ある時大きなスーパーに行って納豆を買おうと。一度は手に取ったんだけど、作ったところを見たら戻して、北海道のを買ったんです。売り場にいた業者さんに「福島のは選ばないんだ」とぼそつとされたの。もう、それが申し訳なくて…(泣く…)

佐久間いく子



～手足をもぎ取られたっていう感じかなあ。目に見えるものなら、掃いて集めて捨てるっていうこともあるけど、目に見えないものだから、これには困っちゃうなあ。なんて言ったらいいのか、どこか言ったらいいのかわからない。

小野田陽子



子どもが負っている傷は、「自分の故郷を言えない」ということかな。自分はどこどこ出身だと言えないということ。「言えいいの」というけど、みんな受け入れてくれないから、言えない」って。

小野田敏之



町民一人ひとりの、それぞれの人の本当の数十年の生きざまを全て知っている双葉町。それが今はそうではない、という状態が現実であることが嫌ですよね。

村田 弘



国家が民衆に対応するときの姿勢は、基本的に全く変わっていない。普通の人に被害が及ぶと、まずそれを隠す。チツソが水銀を放出していたことを最初は隠していた。隠し方がなくなると、それをごまかそうとする。それに学者も絡みます。ごまかし方がなくなると、今度は矮小化する。

杉下初男



こんな狂った人生になるとは夢にも思わなかった。自分はこういう人生持ってきちゃったのかなあ、と思う時もあるなあ。でも、俺より不幸な人はいっぱいいるんだ。

中村和夫



ほんとに福島の復興を願っているんだったら、また福島県民に復興する、と言っているんだったら、日本の国から原発をなくすことがほんとの福島の復興だと思う。

岡部理恵子



私は本当に子どもの健康のことだけ心配なんです。子どもに健康でいて欲しいだけなのに、夫はそれがわからないんです。子どもがどうかなくなっちゃたら、私は自分を責めまくると思います。

渡辺洋子



楢葉町から会津に来て、お友達もできたんですけど、その一人から、「毎月10万円ずつ貰ってっぺ？」って、言われたんです。それがきっかけでガタガタと、いろんな病気を背負っちゃったんです。「我々が養っている」って、受け取ってしまっ。

武藤類子



被害にあった人は責任があると思いましたが。それは、「他の人をまた同じ目に合わせない」という責任です。「人に罪を問う」ということは、「自分が何を背負うか」ということです。問うことによつて、また自分がすべきことが見えてくるんじゃないかと思うんです。

松本徳子



避難者たちの多くは、やっぱり病んでいるんですね。生活が困窮していて、それこそ通帳にお金がない。薬を飲まない寝られない、とか。うつ状態ですね。…子供だって精神的に不安定なところに、自分の親が病んでいるのを見るのはかなりつらいでしょうね。

藤島昌治



これで私の人生がもう終わったのかなあ、と思いましたよ。生きている意味がなくなったのかなあと思ひ、もうぼんやりしていましたね。いま思うと、そういうことが男の人が朝から酒を飲んだりすることにつながっていくのかなあと思いますね。

大河原多津子



有機栽培をして大事に守ってきた土地、畑…それは私たちだけのものではないんです。夫は6代目でその前の方々が大事に大事にその畑を作ってきたんです。それをセシウムが降ってきたからって捨てることもできない。できれば息子に引き継いでいきたい。そういう場所です。